



①フタコブラクダのジェシー ②目覚めたばかりのフタコブラクダのジェシー ③人気者アルパカのりく君
④お馴染みの南国の鳥・オオハシ ⑤見た目は怖いがおとなしいハシビロコウ

いるからだろう。
フタコブラクダのジェシーは、ヨーロッパの動物園生まれ。毛並みがとても美しい。飼育している男性に聞くと、毎日シャワーで汚れを落とし、丁寧にブラッシングをしているとのこと。おそらく一日の終わりに、身体を撫でてやり、声をかけ労をねぎらっているのだろう。ここでは人も動物も本当に幸せそうである。ホッとさせられる。
この施設のキャッチフレーズは、花と動物と人とのふれあい共生パーク。
共生とは、2種類の生き物が利益を受けながら暮らすこと。私たちの最も身近で共生がうまくできている動物と言えば、真っ先に思い浮かぶのが犬だ。映画「シズンズ2 万年の地球旅行」(2015年フランス)では、犬の起源について、こう解説している。何千年もの昔、群れから離れ、自力では狩りができなくなったオオカミが、腹をすかせ人間の集落に近寄っ

てきた。怖さを知らない人間の子どもが餌を与えたことがきっかけで、オオカミは集落の近くに住みつく。やがて集落が襲われないよう夜間の見張りをするようになり、番犬へと変化していった。このように共生とは、簡単に言うともちつもたれつの関係なのだ。
これまでに、ストレスで檻の中を行ったり来たりしている猛獣の哀れな姿や、狭いプールで泳がされている巨大なジンベイザメやマンタを見て、私は強い違和感を覚えてきた。そこには共生とは程遠い、人間のエゴイズムだけが感じられたからだ。
しかし、神戸どうぶつ王国は、これまでの生き物系のテーマパークとは一線を画しているように感じた。性格が穏やかで人間と共生できるような生き物だけを選び、適正な環境と深い愛情で大切に育て、その見返りに来園者へひとときの癒しを提供しているからだ。

ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第121回

共生とは



大きな優しい瞳に見つめられ、私は心を奪われてしまった。
相手はアルパカのりく君。1歳半。人工哺育で育てられたため、とても人懐っこい。手を伸ばすと頭を寄せてくる。愛しいこそ

の姿に一目ぼれをしてしまったのだ。
神戸どうぶつ王国は、生き物好きの私にとって、まさに楽園のような場所だった。
ただ遠くからうっとり眺めるだけではなく、大好きなアルパカやフタコブラクダを手でさわったり、餌も与えられる。強面の鳥として知られるハシビロコウや珍しいフタコブラクダも柵のない空間で自由に過ごしている。カピバラやカンガルーは通路をウロウロと歩き回り、ワオキツネザルが足元を走り抜けていく。とにかく動物との距離が近いのだ。
神戸花鳥園をリニューアルし、2年前にオープンした神戸どうぶつ王国。近くに、これまで行かなかったのは、各地によくある小動物とのふれあい公園のようなものだろうと思っていたからだ。ところが神戸市のインフォメーションレディをしている友人に勧められ、行ってみたい。
3月初旬にもかかわらず室内外とも花



花が咲き乱れるインサイドパークは、映画「繕い裁つ人」のロケ地にもなった。
March.2016.KOBE

が咲き乱れ、手入れされた緑はつやつやしている。園内にはごみ一つ落ちておらず、動物を飼育しているのに嫌な匂いもない。休日で家族連れが多かったが、放し飼いにされている動物たちは興奮することもなく、人とのふれあいをのんびりと楽しんでいるかのようだ。きっと愛情たっぷり育てられ、人間を信頼して